無料

すくらむ

かわさきの男女共同参画情報誌

vol. 75
2023.6

かわさきで生きる女性の声の聞き書き

次世代へのメッセージ

https://www.scrum21.or.jp/

特集
Special Contents

かわさきで生きる女性の声の聞き書き

次世代へのメッセージ

すくらむ 21 では、かわさきで生きる女性の声を次世代に繋いでいくため、「かわさきで生きる女性の声の聞き書き調査」を実施しています。2022 年度は川崎のフロントランナーとして走ってこられた３名の方にお話を伺いました（おひとりは講演、おふたりはインタビュー）。聞き書きの全文は 2025 年度を目安に報告書として発行する予定です。今回は聞き書きの一部をすくらむ通信の読者にお届けします。

講演 1

川崎市男女共同参画センター初代館長
（1999 年 8 月～ 2009 年 3 月）

なかむら　りつこ
中村 立子 さん

今日お話するのは、まず私がなぜこのセンターの館長になったかということです。私の「軸」は理系で、理系の勉強をし、学生に教える仕事をしています。それがここの館長という、一生懸命になれることに出会えたのはとてもラッキーでした。「棚からぼた餅」と言うけれど、待っていたらぼた餅が降ってくるのではなく、準備が整ったところに降ってきたら拾うことができるのですね。そのことは私の活動の広がり、学習の深まりと関係しています。

私のファーストネームの読み方は、だいたい「タツコ」と間違えられます。幼いころは「タツコ」でした。生まれたとき父が示した名前は「立子」と「汀女」。どっちがいいか聞かれた母は、まだ「タツコ」のほうがましだと思ったそうです。父は多趣味で俳句も熱心にやっていました。俳句の世界で自立して生きている女性は中村汀女と星野立子だけだ、自立した女性に育てたいと思ったらしいです。でも小さいとき病気をするなどして、母が姓名判断に行くと「読み方を変えるだけでも違うよ」と言われたそうです。それから「リツコ」と呼ぶようになりました。

当時、日本は非常に貧乏でした。みんな貧乏だから助け合うこともできた。父はダイバーシティな感覚がわかる人でした。社会が包摂しない人を自分が包摂していた。父は小さな会社の実質的なトップでしたが、どこかで出会った、社会的には外され気味だったかもしれない人も会社に入れたりしていました。千葉港の倉庫会社で、近くに海水浴場もあったので私と弟はよく遊びに行き、いろいろな人たちが世話してくれたりしました。倉庫の現場で荷役をする鳶職の人たちとも交流しました。

母は国分寺駅近くの酒屋の娘でした。家制度では長男が家を継ぎ、次男は学歴をつけ、女の子は結婚して外に出るから学歴はいらない。母は高等師範に行きたかったけれど、行けない代わりにお茶、お花、和裁を学び免許を取りました。終戦後まもなく父と結婚し、本の行商を

したり、鶏を飼って卵を売ったり汗をながしていました。世の中が少し落ち着くとお茶やお花を教え、和裁もしていました。「私は高等師範に行きたかったのよ、本当は」って、ずいぶん愚痴を聞かされた。「行けばよかったのに。なんで私にそんなことばかり言うのか」とずっと思っていました。今になると母も一生懸命だったとわかります。

小学３年から６年まで同じ男の先生で、二つ影響を受けました。一つ目が理系に進むこと。先生はシベリア抑留の経験者で、あるとき、シベリアのような寒い地域では二重のガラス窓になっていて、「リンゴをガラスとガラスの間に置いておくと焼きリンゴみたいになっておいしいんだよ」って言ったんです。そういうふうに寒さということを教えてくれた。理科の実験もマジックのようで、いろんな仕掛けで生徒の関心を導いてくれました。二つ目は、先生はボーイスカウトの隊長で、女の子は入れないと言われて私ががっかりしていたら、後日、船橋にもガールスカウトができたと教えてくれました。そこでまた素晴らしいリーダーたちに巡り会うんです。みんな仕事を持っていて、最初のリーダーが教育委員会の指導主事さん、それから保育士さん、保健師さんでした。

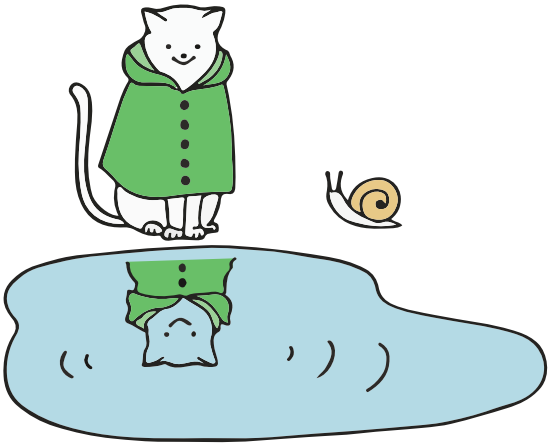
大学は、理科系に行きたいと父に言ったら「それだったら薬剤師がいいよ」って言われました。女が理系で独り立ちできるのは薬剤師だということで、社会を反映していると思います。私は反発して、やりたいこともあったので工学部に行きました。

４年生のとき、私は女だし弟もいるから就職しないと悪いと思い、一カ月近く工場実習でお世話になった企業や、ワンダーフォーゲル部で山登りをして自然環境啓発に興味を持ったのでメディア関係企業に電話しましたが、「女の人は採用しません」。そうはっきりと言われる時代だったんです。本心は大学院に行きたかったのです。父の後押しをもらい修士課程に入りました。修士を出たのは就職が大変な時期でしたが、私は最初に就職が決まったんです。女性だからです。女子大で女の助手を募集していた。理系の教科の教授は男、それ以外は女という時代で、女子学生たちの実験などの面倒を見る役割で、今で言う助教です。そこでびっくりしました。私はほとんど男性の中で育ち、教育を受けた。ところが私の勤めた大学では当時「女の子だからその程度で勘弁してやるよ」とか、何でも「女の子だから」。すごく不満がありました。女の人が差別される現場に直面して、女子教育をライフワークにしようと決めました。

さらに驚くことがありました。就職２年目に結婚し、

古くからいる女の先生に報告すると「あなたは知らないかもしれないけど、助手は３年（まで）なのよ」。若年定年制があったんです。人事に聞いたら「３年という内規がある」と言うの。内規を見せてと言うと「見せられません。もし訴えられたら負けます」。若年定年制は違法なんですよ。それでも働き続けたいと思ったときに言われた言葉が「だってあなた、博士号ないでしょ」。大学には博士号を持つ人が何人か必要で、男の老教授を外から引っ張ってくるわけです。結局、大学を辞めて博士課程（ドクターコース）に入り直しました。

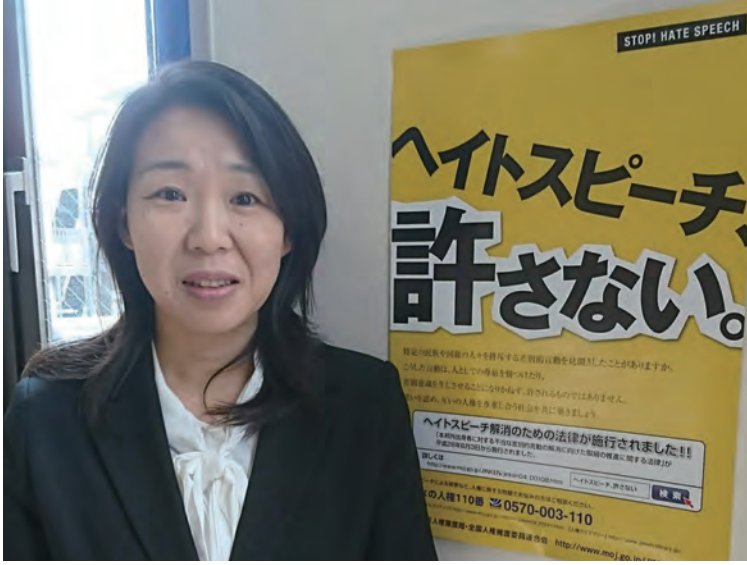
ドクターは出たけれど仕事がない。非常勤の仕事をしていたときに子どもが生まれました。私は麻生区在住ですが、近くに住む教え子が少し先に子どもを産んで、保健師さんたちと関係があったんです。それで私に声がかかり、「’91かわさき女と男のフォーラム」（1991年）に参加しました。その時代の女性たちの空気を勉強しようと軽い気持ちだったのですが、１歳の子がいるのに実行委員長をさせられました。その翌年、「福祉を語る婦人のつどい全国大会」の実行委員を頼まれました。続いて「女性センター建設構想委員会」が始まり、そこから川崎の女性問題とのかかわりが本当の意味で出発します。



インタビュー
2

川崎市ふれあい館 館長

崔（チェ） 江以子（カンイジャ） さん



お会いするのを楽しみにしていました。お生まれは桜本ですね。

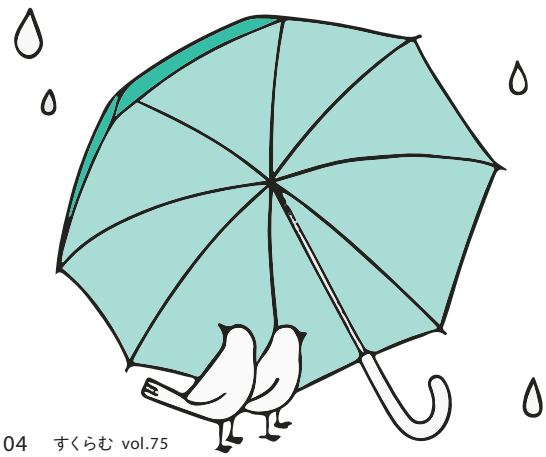
みなさん、ようこそ。私たち桜本の街はみなさんの訪問を歓迎します。差別をしに来る人以外は大歓迎の街です。

私はふれあい館がある桜本１丁目で生まれ、育った在日朝鮮人３世です。国籍は韓国です。母の家は母子家庭で大変貧しく、私の祖母が磁石にひもをつけて、川崎駅前から朝鮮人集住地の桜本、池上町まで６キロぐらいを歩いてくぎを拾い集め、工場で安く買い取ってもらうのを母も磁石を引いて手伝ったそうです。父はお酒も人助けも好きなんですがあまり仕事が好きではなく、家計は母が支えていました。

学校は地元の学校ですね。そのころ差別の体験は。

多くの在日コリアンは日本の通称名を名乗っていました。金（キム）さんは金本さんや金田さんというふうに。私も日本の名前で中学校まで通いました。昭和の全体主義教育を受けていますので、人と違うことはだめだという意識があり、自分の違いにふたをしてわからないようにしていた。

ルーツの名前を名乗る朴（パク）さんという同級生がいました。中学生のころパックンチョというチョコレートが発売され、パックマンというゲームがはやったら、からかいが始まったんです。「パックマン食っちまうぞ、韓国帰れ」「パックンチョはチョンだから朝鮮に帰れ」とか。自分も差別されるのが怖くて、助けるどころか自分に矛先が向かないよう、からかっている男の子集団に同調するような態度さえ取ったと思います。そのぐらい自分の違いがばれるのが怖かった。姉が同級生からいじめられたとか身近に結婚差別、入居差別もあった。被差別性を見聞きしてだんだん身に付いてしまった意識だったと思います。



そんな状況が変わるきっかけは。

高校生のときに社会科の先生が、授業が終わると私の席に近寄ってきて「オモニ元気？」と、ぼそっと言うんです。私が在日コリアンだと知って、ふれあい館に私を連れていきたかったんですね。しかも母が自営している飲食店のお客さんでした。私は社会科準備室に行って「先生、お願いだから学校で私に声をかけないでください。今度先生が朝鮮とかオモニって声をかけてきたら私、学校やめますから」。そうしたら先生のほうが上手で、「一回だけふれあい館に一緒に行ってくれたら二度と声をかけない」と言われたので、高校２年生のときに初めて来ました。

ふれあい館は、川崎市が差別をなくして共生社会を実現するために設置した、こども文化センターと社会教育施設の複合施設です。当時は中学生部と高校生部があり、在日コリアンや外国人の子どもが集まって悩みや夢を話したり、勉強したりしていました。

何がびっくりしたって、職員さんが「朴○○です」「金●●●です」って自分の名前を言うんです。高校生も「私は金何とかです」って肩に力を入れずに名乗って、周りの日本人も「ねえ、裵（ペ）さん」と普通に呼んでいる。生まれたときから民族名の人も進学や就職したときから民族名の人もいて、体験談を聞くと自分に重なるんですね。そのときにできた友達から「来週の水曜日も待ってるね」って言われたらとても気になって、先生としては「しめしめ」ですよね。そういう出会いの中で、自分が何者なのか、どう生きた

いかを見つめるようになりました。

最初にふれあい館へいらしたとき、ご自分の名前は…。

自分から言えないんです。でも私の下の名前を見て「これはカンイジャでしょ」と、つるっと読まれちゃう。私も応答してしまい、そう呼ばれることに慣れていく。ただ、学校の友達にお茶に誘われても「ふれあい館に行くから行けない」って言えないんです。「何それ」って言われたらうそをつかなきゃいけない。でも、ふれあい館で堂々と生きている人たちを見て、差別される自分が悪いとか、差別は自分が弱いからとかじゃなくて、差別する人が悪くて差別そのものが社会悪なんだと思うようになりました。

当時付き合っていた彼氏にまず打ち明けてみたんです。「あのね、私の親が韓国人なの」って遠回りに言ったら、「えっ、両方とも？」。両方じゃ悪いような気がして「ううん、お父さんだけ」って割り引いちゃった。勇気が出切らなくて空振りの気分になったのを覚えています。でもふれあい館のこの部屋で、初めて「チェ・カンイジャです」って名乗ったんです。周りの人たちが拍手してくれました。その経験を力に、高校3年の秋に名前を変えました。ホームルームで話す機会をもらい、「私にはチェ・カンイジャという本当の名前があって、私は外国人です。みなさん、チェ・カンイジャと呼んで、支えてください」とお願いしました。友達には受け止められましたね。

ふれあい館には在日コリアンや人権に関する書籍があり、たくさん読んで、学びの欲が強まり韓国に留学しました。国籍がある韓国で自分は何者なのかを確かめてみたかった。でもなかなか自分の居場所は見いだせませんでした。発音が変だとか変な名前だとか、カフェで日本語をしゃべっていると植民地支配の歴史を批判されるとか。韓国には親戚もいるし父方のお墓もあるけれども、私のふるさとは桜本だと確かめた留学生活でした。日本に戻った際に、ふれあい館の職員にたまたま欠員があったので1995年から勤務しています。

ふれあい館の活動内容を教えてください。

私の一日の仕事は例えばこんなふうです。午前中は日本語の勉強に来ている識字学級の外国人市民の方たちにご挨拶をし、子育て中の方のために別の部屋で預かっている子どもたちと遊んで、午後になると大学のゼミや研究者を迎え入れて、夕方は小学生たちと鬼ごっこをしてへとへとになったり、中学生の恋バナを聞いてときめいたり、夜は市民向けの講座をする。

以前は川崎の外国人は在日コリアンが一番多かった。今は中国が一番多く、在日コリアン、フィリピン、ベトナムと続きます。この地域も同じです。シングルマザーのフィリピン人家庭との出会いも多いです。エンターテインメントビザで来日して日本人男性と結婚したら、「この手紙、なんて書いてあるの」と聞いても夫に「そんなのも読めないのか」と暴力をふるわれ、離婚して子育てをしているような家庭です。フィリピンのシングル女性は、非識字でも働ける食肉加工の工場などの時給のいい深夜労働を支えている。生きるのに精いっぱいで支援が届きにくい。家庭訪問して食料をお届けし、「学校からの手紙でお困りのことはないですか」などと聞くアプローチがニーズに合います。

ふれあい館は屋根のある公園と同じで、いつでもどんな目的でも、目的がなくても来れられる場所。子どもにも大人にとっても「居場所」なのです。子どもたちが来たとき「何しに来たの」って絶対、問いません。「ようこそ。会えてうれしいよ。お母ちゃん元気？」と、精いっぱい歓迎します。

崔江以子さん（右）と、インタビュアーの林美子さん（元朝日新聞記者）（左）

インタビュー
3

神奈川県弁護士会所属　弁護士

横溝（よこみぞ） 正子（まさこ） さん

まずは前半生をうかがいます。ご出身は埼玉ですね。

今の白岡市で、生まれ育った頃は農村地帯でした。1935年、昭和10年生まれで来年米寿です。お寺の5人きょうだいのしまいっ子（末っ子）。父が住職で校長先生、母も女子師範学校を出て先生をしていました。母は躾に厳しい人で、掃除の分担場所が決められていて、登校する前にそこの掃除をしていくとか、堅苦しい人でした。終戦のとき私は小学4年生でした。戦後、急速に男女平等が進められ、私は小学校卒業のとき、女子で初めて答辞を読みました。答辞を読んで上を向いたら男の校長先生が涙ぐんでいました。「女のこの子が初めて答辞を読んだ」って思ったんじゃないでしょうか。

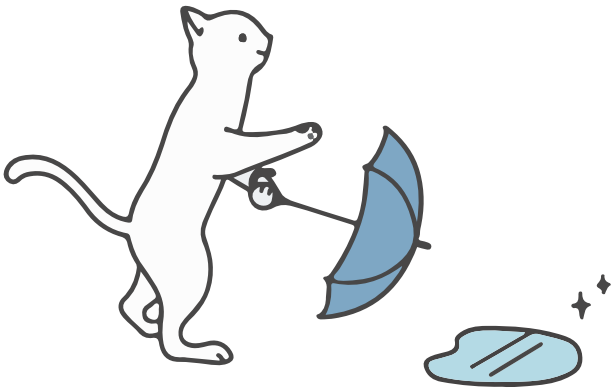
あのころ義務教育が3年延びて、市町村立の中学校ができて原則そこへ行きましたが、私は、東京の淑徳学園が空襲で焼け出されて与野（現さいたま市）に作った中学校（現淑徳与野中学・高等学校）に入ったんです。高校は浦和一女（県立浦和第一女子高校）へ行きました。

大学の法学部に行こうと思われたのは？

中学のとき、旧制三高を出て東大の英文科に進んだ先生が、社会科の授業で、これからは民主主義の社会にならなければならないことを強調して「君たちはお母さんやおばあさんたちのように、夫に従い、父に従いと決められた生き方じゃなくて、職業も自由に選んで自立して生きていいんだ」って言い、その先生は英文科だったので、フランスやイギリスの女性はこうだよと小説や実際の外国人の生活の話をしてくださった。私の母も、明治生まれなのに「女も自分で餌を拾わなくちゃ」っていうのが口癖でした。その頃、女性の職業は限られていたのでお茶の水女子大の食物学科に行って栄養士になろうかなと思っていましたが、一つ年上の姉が大妻短大に通う電車の中で、明治大学短期大学（旧明治女子専門学校）の法律科に行っている人に会い、パンフレットをもらってきてくれました。そこの卒業生で弁護士や裁判官をして活躍している人がいると書いてあったのを見て、明治大学短期大学の法律科に入りました。

昔は弁護士法に、弁護士は「帝国臣民にして男子たること」という条文があったのですが、昭和11年（1936年）に改正され、「男子たること」は削除されました。明治大学は昭和4年（1929年）に専門部女子部という女性が法律を学ぶ道を作り、昭和13年に女性が3人、初めて高等試験司法科試験に受かったのです。日本初の女性裁判官になった三淵嘉子先生や活躍中の女性弁護士がゼミに来たり民法を教えたりしたんですが、みんな生き生きとしてきちんと仕事を持って、それでいて帽子をかぶってスマートでしゃれている。そんな先輩たちに会い、弁護士になろうと決め、明治大学法学部3年に編入したのです。

昭和40年（1965年）に司法試験に受かり、昭和43年4月に弁護士登録をしました。修習生のときに結婚して、夫の父が川崎で弁護士をしていて、夫も私の1年前に父の横溝法律事務所に入っていました。私は川崎で女性弁護士第1号、神奈川県で第6号です。平成6年に横浜弁護士会で初、東京高裁管内(東京3会＋関東10県11会)でも



初の女性弁護士会長になりました。

その頃は女性弁護士が非常に珍しいわけで、ご苦労もあったんじゃないですか。

戦後の平等意識、人権意識が今より盛んなころでした。昭和 50 年（1975 年）が国際婦人年で、（弁護士になったのは）その 7 年前です。男女平等の機運は盛り上がっていました。昭和 56 年に「かながわ女性プラン」を作ったときは起草副委員長をしました。昭和 60 年の川崎の「男女共同社会をめざす計画」のときも起草委員長をしました。国際婦人年や女子差別撤廃条約批准に向けて、各自治体でプランを作るときに弁護士は重宝されました。

インタビュー・構成 ／ 林 美子さん

札幌市出身。1985 年朝日新聞に入社し、経済部、北海道報道センター、特別報道部などを経て 2016 年退職。現在はジェンダーや労働分野を中心にフリーランスで取材、執筆を続ける。お茶の水女子大学大学院博士後期課程在学（ジェンダー学際研究専攻）。「メディアで働く女性ネットワーク」会員。

今回は３名のフロントランナーからの聞き書きの内容を一部お届けしました。
それぞれのお話の続きは 2025 年度発行予定の報告書に掲載いたします。どうぞお楽しみにお待ちください。

ミニコラム

日本の女性弁護士の歩み

1936 年に弁護士法が改正され、女性にも弁護士になる道が開かれました。
1938 年に高等試験司法科試験に３名の女性が合格、1940 年に初の女性弁護士３名（久米愛・三淵嘉子・中田正子）が誕生しました。
３名から始まった女性弁護士は、2022 年には 8,630 名に、同年の司法試験における合格者のおよそ 28%を女性が占めるまでに広がりました。

2022 年

裁判官に占める女性の割合・・・	**28.2%**
検察官に占める女性の割合・・・	**26.4%**
弁護士に占める女性の割合・・・	**19.6%**

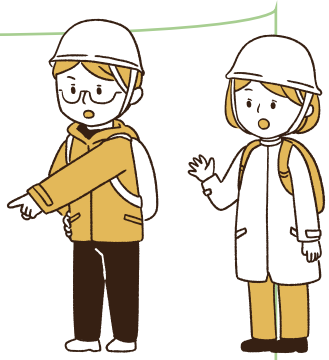
2022 年度版弁護士白書より

参考： 日本女性法律家協会「協会と社会の歴史」（https://j-wba.org/history-association）
日本弁護士連合会「2008 年度弁護士白書【特集Ⅰ】男女共同参画と弁護士」（https://www.nichibenren.or.jp/document/statistics.html）
日本弁護士連合会「基礎的な統計情報（2022 年）」（https://www.nichibenren.or.jp/document/statistics/fundamental_statistics2022.html）

女性の視点で考える防災の知恵袋

24

他人事じゃいられない



東日本大震災をきっかけに、生理用品の備蓄や女性への支援の在り方に取り組み始めました。お仕事で防災講座をさせていただく際には、必ず生理用品のお話をするようにしています。若い頃は、人前で生理の話をすることは恥ずかしかったのですが、年を重ね、恥ずかしさより「このままじゃまずい、なんとかしなくちゃ」という気持ちが先に来るようになりました。我々が感じてきた「大変さ」と同じことを、若い人たちが感じなくていいように、今できることをやらなくちゃ！という気持ちです。

今年3月、NHKで「生理のおじさんとその娘」というドラマが放送されました。主人公は、生理用品メーカーの広報担当として勤めるシングルファーザーの男性です。生理についていろいろと勉強をするだけでなく、生理の疑似体験までして、その大変さをわかろうとしている彼に、ある女性がこういいます。

「でも、何をしたところで、生理の本当のつらさはわからないですよね」

主人公はぐっとつまり、でも言葉を続けます。

「本当のつらさはわかりません。ですから、少しでもわかるように寄り添い続け、努力しているつもりです」

この言葉を聞いて、「ああ、防災と同じだ」と思いました。例えば、被災した人の状況は一人ひとり違います。同じ家に住む家族でも、つらいと感じること、大変だと思うこと、気になることは違います。ひとりとして「同じつらさの人」は居ません。被災地支援をしている人の中には、被災経験をきっかけに支援を始めた人も居ます。「同じようなつらさ」をしたことがあるからわかることもありますが、「全く同じつらさ」の人はいないと思います。また、被災したことはないけれど、大変な状況にある人の助けになれればと支援を始めた人も居ます。被災した本当のつらさはわからなくても、少しでもそのつらさをわかりたいと思い、大変な気持ちを聞かせてもらい、涙し、学び、そして何ができるか考え、動きます。

「被災した本当のつらさはわからないですよね」と言われれば、私自身もすべてのつらさが分かるわけではありません。大変だとわかっているからこそ、他人事にはできません。でも、すべてを自分事にすることもできません。そんなとき、私は「自分たち事」という言葉を思い出します。これは、私が尊敬する先生が教えてくれた言葉で、「自分事」ではなくても「他人事」ではない、「自分たち事」です。

この原稿を書いているゴールデンウイークのある日、石川県の能登半島で大きな地震がおきました。天候が悪くなっていく中、心細くつらい思いをしている女性達はいないだろうか、と気になります。そして、もしも今、ここ川崎でも同じような地震が起きたら、私たちはどうなってしまうのか、今の備えで大丈夫なのか、もう一度考え直してみる必要がありそうだと思います。こう考えていけば、遠くでおきた地震も「自分たち事」です。どんな支援が必要か、情報を集めてできる支援を進めていきたいと思います。

ここまで読んでくださったみなさん、どうぞこの機会にご自身の備えを見直してみて下さい。何を備えたらいいかわからないという方は、「それが無いと、あなたの生活が大変になるもの」を考えて備えに入れてみて下さい。

建設コンサルタント（日本ミクニヤ株式会社）勤務
（一社）福祉防災コミュニティ協会 事務局兼務
防災士　上園 智美

実話に基づくストーリーでLGBTQ＋やフェミニズムについて分かりやすく紹介している『パレットーク』の副編集長である伊藤まりさんより、若い世代は何に関心があって何を考えているのか、若い世代のおひとりとして、コラムにて届けていただきます。

28 すくらむコラム

「政治とジェンダー」身近なところから考えてみると…

少し前、久しぶりに実家に戻り両親と食事をしていたときのことです。ちょうど統一地方選挙の時期で、議会におけるジェンダーバランスの話題になりました。父親とは政治やジェンダーに関する考えが合わないことも多いので、久々の家族のご飯が殺伐としたものにならないか、内心ヒヤヒヤしながら…。

「政治におけるジェンダーバランスを平等にしていこう」という取り組みはパリテと呼ばれ、世界中で重要視されているテーマでもありますが、日本の状況はまさに悲惨そのもの。衆院での女性議員の割合は1割を切り、地方自治体を見ても14.9%の市区町村で女性議員はゼロ。政治分野におけるジェンダー平等の遅れが、日本のジェンダーギャップ指数の足を引っ張っている一因だと言われています。

ではそもそも、なぜ政治におけるジェンダー平等が重要なのでしょうか。「優秀な人がリーダーになることが優先で、ジェンダーで考えるのは本末転倒じゃない？」という意見もよく耳にします。きっと父親もそう言い出すに違いないと察知した私は、こんなふうに話してみました。

「たとえば地域の防災担当の人が男性ばかりの地域で、いざ災害が起きてしまったときに生理用品について理解がなく、多くの生理のある人が困ってしまった、とかね。リーダーの立場にある人に偏りがあると、視点にも偏りが出てくるじゃない？どんなに優秀な人でも、自分の後ろ側には目はついていないからね」

すると、地域の町内会で持ち回りの会長を任されている父は、ハッとした顔をして「今ちょうど地域の防災備品について話し合っていたところだけど、確かに生理用品のことは考えていなかったな。担当の〇〇さんにも話しておこう」と言いました。意見の合わないことの多い父親にめずらしく話が通じた安堵と同時に、自分とは違う立場の人のことを想像することがいかに難しいかを再確認した瞬間でした。だからこそ、政治という領域にできるだけ多様な人たちがそろっていることの大切さも。

「政治は、選挙のことを24時間考えられる人だけに任せておけばいいってことじゃないよね」

ジェンダーに限らず、この社会には本当に多様な人たちが共に生きています。たとえば育児や介護に追われている人。長時間労働でつらい思いをしている人。来月の光熱費を心配してエアコンをつけることをためらう人。健康状態や障害の有無。働きながら学費をまかなっている人。若者、高齢者。目に見える違いも見えない違いも含めて、こんなにも私たちの生活は多様なのに、ふと政治を見てみると明らかな偏りがあることに、素朴な驚きと恐怖を感じます。

選挙のことを24時間考え続けられる人というのは、この社会にどれだけいるでしょう？家族に家事を負担してもらい、仕事に100%まい進できる人はどれだけいるでしょう？

多様な状況におかれた人が挑戦しづらい選挙の仕組み自体も、「ある一定の属性の人だけで占められた政治シーン」に慣れてしまっている私たちの認識も…。明日の私の生活を守るために変えていかなきゃいけないことはたくさんあると強く感じた夜でした。

伊藤まり（パレットーク副編集長）

1993年東京生まれ。早稲田大学卒業。編集ライター。大学在学中よりフェミニズム活動に参加し、署名活動やパフォーマンス、レクチャーなどを行う。ウェブメディア「パレットーク」副編集長をつとめる傍ら、ジェンダーやフェミニズムに関しての執筆や講演を行う。

BOOKS

2021 年 12 月発行
（著者）松田純佳
（出版社）ナツメ社

『クジラのおなかに入ったら』

クジラのおなかに入ったら、何が分かるのでしょうか？著者は、浜辺に打ちあがってしまったクジラやイルカを解剖することで、生前のクジラやイルカが何を食べ、どのように生活していたか、特徴を明らかにする研究をしています。陸に打ちあがったクジラやイルカを対象にした調査をストランディング調査といい、ストランディング（陸に打ちあがった状態のこと）の連絡を受けると、日本全国を北へ南へ、吹雪の日も夏の暑い日も現場に向かいます。地球上で最大の動物であるシロナガスクジラが史上初めて日本の浜辺に打ちあがった際には、10メートルもあるクジラを解体しながら、文字通り“おなかに入って”、胃の内容物を採取します。

本書にはこの分野で働く多くの女性研究者が登場しますが、例えば海洋科学を含む理学分野における女子学生の割合は非常に少なく、2020年度の調査※では、学部で27.8%、大学院（博士課程）では20.2%と言われています。筆者と先輩研究者との出会いには、まだまだ女性の少ない研究者の世界で同じ道を目指す次の世代へのあたたかいまなざしが感じられます。結婚・出産のタイミング、キャリアの中断、体力の差など著者自身が感じる女性研究者としての困難も綴られていますが、同時に悩める後進を力づける存在になりたいという筆者の想いが本書の全体から伝わります。動物好きの少女がひとりの研究者になるまでの10年に渡る研究の日々がいきいきと描かれています。

※令和３年度版男女共同参画白書

2021 年 9 月発行
（著者）寮美千子
（出版社）西日本出版社

『なっちゃんの花園』

川沿いの小道を抜けた先にある河川敷の花園、それは家族と過ごした大切な土地を守るなっちゃんがひとりでつくりあげた秘密の花園でした。戦前に在日コリアン２世として生まれたなっちゃんは、戦後の貧しさと差別の中を生き抜きます。娘として妻として母として女として…人生のさまざまな場面で大きな困難に直面しながらも、愛される人柄とあふれる機知で乗り越えていく姿に胸が痛みながらも励まされます。いじめや貧困により小学校も十分に通うことのできなかったなっちゃんは、50歳を過ぎてから夜間中学校に通って読み書きを習い、文字という力を得て一層力強く人生を切り開いていきます。著者との偶然の出会いで語られることになった壮絶な人生譚。著者は、なっちゃんの経験を通して被差別部落やアイヌ民族の問題にも視点を広げていきます。いくつもの苦労を乗り越えて、「いまが一番幸せ」と語るなっちゃんの言葉が胸を打ちます。

2021 年 11 月発行
（著者）ジゼル・アリミ
　　アニック・コジャン
（翻訳）井上たか子
（出版社）勁草書房

『ゆるぎなき自由　女性弁護士ジゼル・アリミの生涯』

女性弁護士のアイコンと言われたら2020年に87歳でその生涯を終えたアメリカの最高裁判所元判事ルース・B・ギンズバーグを思い出す人が多いでしょう。同時期、フランスにも女性や少数者の権利のために闘った女性弁護士がいました。ジゼル・アリミは、当時のフランス保護領チュニジアに生まれました。父親は娘が生まれたことに大層がっかりし、成長した後のジゼルは他の多くのチュニジアの娘と同じように、同じ家に住む男たちのために家事をこなさなければなりませんでした。男のきょうだいとの違いに納得のいかないジゼルは10歳でハンガーストライキを実行。これが彼女のフェミニストとしての最初の勝利でした。その後フランスで弁護士になったジゼルは、フランスにおける避妊・中絶の合法化、離婚に関する法改正、強制わいせつ罪の重罪化、パリテ法（議会の男女同数制）につながるクオーター制の導入など、フランスのジェンダー平等において大きな功績を残します。松明の灯を消さないように次世代に引き継いでもらわないといけない、とジゼルは言います。2020年に93歳で生涯を閉じたジゼルからの次の世代へのメッセージが詰まっています。

イキメン研究所

イキメンコラム

「保育園のお迎え」という分担ひとつ分の重みについて

５歳の長女と２歳の次女、愛する妻と暮らすDパパです。

妻が資格取得し転職するというので、休みの日に子どもの面倒を引き受けました。休日のたびに体力が削られる数か月が過ぎ、その甲斐あって妻は資格を取得し、転職に成功。これで少し楽になるかな、と喜んだのも束の間。キャリアアップして責任が増えた妻、帰りが遅くなる日も出てきて、話し合いの結果保育園のお迎えも分担することにしました。登園はこれまでもやっていましたし、平日のタスクに「お迎え」という項目がひとつ増えただけです。それだけですが、日々の緊迫感が半端ありません。残業が一切できなくなります。ギリギリで遅れると、他の子が補食を食べ始める中、我が子が恨めしそうにそれを見ている、なんて光景になるのです。それは避けたい。さらに、転職したばかりの妻には有休がないので、熱を出した際のゲリラお迎えもふりかかってきます。しかし、仕事が都合よく終えられない日もあるわけで…。

これまでもここぞという一日だけならお迎えしてきましたが、自分がメインとなってずっと続けると思うと正直「仕事にならない」と音をあげそうになりました。物量的な両立どうこうというより、精神的にしんどい。一か月続けただけでへとへとです。でも、妻はこれをずっとやってくれていたんですよね。思わず妻が働いている方角に向かって「なむなむ」と合掌しました。

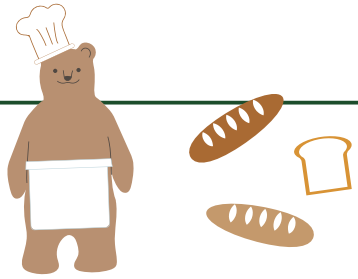
育休取得が当たり前になってきました。登園時にパパを見かける機会も増えてきましたが、お迎えを始めてから、降園はまだまだママが圧倒的なことに気付きました。出産前後のドラマチックで新しいことだらけの時期もパパとして頑張ってきたつもりですが、そのあとにつづく地味で目立たない日常の負担をどこまで分担していくのか、見ているようで見落としていたなと思った次第でした。

イキメンメンバー募集中

“イキメン”とは、「家庭でも地域でもイキイキと過ごすパパ」のこと。
すくらむ21では、男性を対象とした事業を「イキメン研究所」として、男性が地域に目を向ける契機（第一子誕生）ととらえて事業を行っています。2013（平成25）年度発足して10年目を迎えます。

◀イキメン研究所の活動紹介はこちらから

◀女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクト（通称：JKB）とのコラボ動画はこちら



毎月第３水曜日　定期開催

すくらむ２１プチマルシェ

川崎市内の女性起業家や起業準備中の女性、地域で活躍できる場を求める女性が、自分の作ったものを販売し、お客様の反応を直接確かめてみたい、他の女性起業家さんとの協業のチャンスを探してみたいなど販売実践の場として、毎月第３水曜日にすくらむ 21 プチマルシェを開催しています。
2023 年度は７月 19 日 (水) からスタートです。お待ちしています。

2023 年　7/19・9/20・10/18・11/15・12/20

2024 年　1/17・2/21・3/13・4/17・5/15

11：30 ～ 13：00　※3 月 13 日のみ第２水曜日開催

※ 飲食物はすべてテイクアウト形式の販売。売り切れ次第、販売終了。

会場：川崎市男女共同参画センター（すくらむ 21）
１階・ホール前ホワイエ　他

「ニットDAY」のご案内

編み途中の作品や、お家にねむっている毛糸がある方、手を動かしながら誰かとお話ししたい方、みんなで集まって編み物をしませんか？

奇数月のプチマルシェの日に開催なので、プチマルシェで買ったものを食べたり、編み方を教え合ったりしながら、自分のペースで編み物を進められます。途中入退出自由で予約不要です。
マルシェのついでにでもふらっとお立ち寄りください。

7/19㊌・9/20㊌・11/15㊌・1/17㊌・3/13㊌

すくらむ 21 プチマルシェと同日開催です

10：00 ～ 13：00　会場：川崎市男女共同参画センター（すくらむ 21）
２階・第２交流室

定員：先着 12 名（予約不要）
※講師なし、一時保育なし　※毛糸と針はご持参ください

かわさきの男女共同参画情報誌
すくらむ

発行年月　令和5(2023)年6月
編集・発行　川崎市男女共同参画センター（すくらむ21）
所在地　〒213-0001
川崎市高津区溝口2丁目20番1号
ホームページ　https://www.scrum21.or.jp/
電話　044-813-0808
FAX　044-813-0864